





世界ジオパーク認定授与式（第3回アジア太平洋地域ジオパーク国際会議）。

つたまちづくりグループ「風待ち海道倶楽部」が誕生。翌年からエコツーリズム活動に取り組みました。

当初は、活動の成果について具体的な数字をあげて説明できず、観光事業者から相手にされませんでしたが、隠岐の可能性を信じて活動を続けたところ、エコツーラー客は少しずつ増加し、旅行代理店からもエコツーラー的要素を盛り込んだ旅行商品づくりが求められるようになってきました。そして二〇〇九年には「日本ジオパーク」に認定。以来、世界ジオパーク認定を目指して活動を続けてきたのです。

### 隠岐は《地球の縮図》

隠岐諸島は小さな島々ですが、じつはさまざまな興味深い資源が凝縮して詰め込まれており、隠岐を知ることによって日本列島の成り立ちや植物分布の経緯、日本の歴史の始まり、さらには地球規模の環境変化や地球の内部のことも知ることができるといえます。ユーラシア大陸から分離して形成された日本列島の地史を示す隠岐諸島の成り立ち、黒曜石を通じたはるか四万年前からの歴史、北方系・南方系・高山性・大陸性の植物が海岸の低地で共存する不思議な植物分布、これらはすべて関連があり、その関係性をひもといていくのがジオパークの楽しさです。

ユネスコ世界ジオパークに認定されるためには世界的な価値を持つ地質資源がなければなりません。ジオパークは地質学者や専門家だけのためのもではありません。一般の方にその地域をより知ってもらう、楽しんでもらうのがジオパークの考え方なのです。こうした考えから、隠岐では「なぜ、天皇が二人も配流となったのか」「なぜ、天皇の即位式で隠岐のアワビが供えられたのか」「なぜ、北海道と沖縄の植物が同じ場所にあるのか」「なぜ、」の答えを探してもらう旅（ジオツアー）の提供を心がけています。

### 認定がスタートとなるジオパーク活動

隠岐ならではの資源を活用した地域・観光・教育振興を

行なう「風待ち海道倶楽部」の活動を引き継ぎ、二〇〇九年から隠岐諸島全体で取り組んでいるのが「隠岐ユネスコ世界ジオパーク推進協議会」(隠岐四町村および経済・観光・住民団体に構成。当初は隠岐ジオパーク推進協議会)です。

ユネスコ世界ジオパークとユネスコ世界遺産。どちらもユネスコの正式なプログラムなのですが、世界遺産は知っているでも世界ジオパークを知らない人がほとんどではないでしょうか。世界遺産と世界ジオパークの違いを説明するときに、世界遺産は指定対象物が主役で、世界ジオパークは地域住民が主役だという言い方もします。世界遺産は地域資源の保全保護が主体となりますが、ジオパークの場合は地域資源の保全保護を行なう一方で、地域資源を活用した教育や経済活動を生み出すことが求められています。また、棒高跳びとハードル競争というふうにも例えても説明します。世界遺産は棒高跳びのように高いハードル(基準)を越えなければなりません。世界ジオパークのハードルはそれほど高くはありません。しかし、四年ごとに再認定審査というハードルを越えなければなりません。しかも、その四年ごとのハードルが段々と高くなっていきます。また、再認定審査では地域資源の価値ではなく認定後の四年間でのような取り組みを行ない、どのような成果を得られたかが評価の対象となります。こうした認定基準の違いもあって、ジオパーク活動は認定がゴールではなく、認定がスタートであると言われています。

## 世界ジオパークをきっかけとした新たな取り組み

### ① 学校教育、ジオパーク学習

私たち隠岐ユネスコ世界ジオパーク推進協議会では、ジオパークという手法を用いて隠岐諸島の地域振興に取り組んでおり、さまざまな関係機関と連携しながら教育振興、観光振興、隠岐のブランド化にも取り組んでいます。隠岐の人々が隠岐の価値、他の地域にはない隠岐の魅力を知ることによって、隠岐に対する誇りと愛情が生まれるだけではなく、ビジネスプランも生まれると考えています。

こうした考えから、ジオパーク活動を始める以前から学校教育および社会教育に積極的に取り組んでいましたが、世界ジオパーク認定をきっかけとして一気にその活動が広がっています。

学校教育においては、ジオパークの地域資源や手法を活用した保育所から高校



高校生と地元パン屋さんの協力で誕生したオキサンショウウオパン。

までの一貫教育に取り組んでいます。ある高校では、一、二年生がジオパーク研究として地域の課題とその解決方法に取り組み、三年生では学校設定科目として「ジオパーク探求」が設けられ、さらに高いレベルでの研究とビジネスプランの構築も行なわれています。

たとえば、隠岐の固有種であるオキサンシヨウウオの特徴（前足が四本指、後足が五本指）を表した「オキサンシヨウオパン」は、ジオパーク研究によってアイデアが生まれ、地元のパン屋さんの協力によって地元のスーパードで販売されるようになっていきます。

環境保全の取り組みとしては、ジオパーク研究を通して隠岐の在来植物の貴重性を知り、特定外来生物であるオオキンケイギクの駆除取り組みは、高校生たちの活動により大人へと広まってきています。公民館活動や地区活動などと連携したジオパーク学習（隠岐学講座）も、以前は協議会の方からお願いをしやつと開催してもらったような状況だったのが、現在は年間三〇回ほど自主的に開催されるようになっていきます。

## ②「隠岐ジオパークツアーデスク」

地元企業においても新たな取り組みが行なわれてきています。これまで、隠岐では観光シーズンが五月から一〇月末までであること、団体



「隠岐ジオパークツアーデスク」のシーカヤックツアー。

旅行を中心とした受け入れの考え方であったためガイドを仕事として生計を立てることは難しいと考えられてきました。また、着地型旅行商品の造成販売を行なう旅行会社の起業も収益の面から考えて経営が難しいとされていましたが、ジオパーク活動をきっかけとして、ガイド会社や着地型旅行商品の造成販売を行なう会社が設立されています。一般的にツアーガイドだけではなく、シーカヤックツアーやトレッキングガイドを行なっている一般社団法人「隠岐ジオパークツアーデスク」（隠岐の島町）は、二〇〇三年に設立された官民共同のまちづくりグループ「風待ち海道倶楽部」がベースとなり、任意団体を経営して、任意団体を経営して隠岐が世界ジオパークに認定されたことを受けて二〇一四年に一般社団法人として設立されました。現在、五人の社員がガイドとして活躍しており、幻想的な洞窟を巡るシーカヤックツアーは若者を中心として人気商品となっています。

なり、任意団体を経営して隠岐が世界ジオパークに認定されたことを受けて二〇一四年に一般社団法人として設立されました。現在、五人の社員がガイドとして活躍しており、幻想的な洞窟を巡るシーカヤックツアーは若者を中心として人気商品となっています。

◇一般社団法人隠岐ジオパークツアーデスク  
〒685-0105 島根県隠岐郡隠岐の島町津戸1537  
電話：08512-3-1005

### ③「隠岐しぜんむら」

隠岐諸島の独自の自然環境の保全保護と持続可能な地域づくりに寄与することを目的として二〇〇六年に設立された「隠岐しぜんむら」(海士町)は、二〇一二年にNPO法人となり、隠岐ユネスコ世界ジオパーク推進協議会と連携した自然環境教育やエ



「隠岐しぜんむら」のスタッフたち。

コソーリズム活動、野生動物調査などのほか、森の幼稚園事業にも取り組んでいます。現在、勤務しているスタッフ九名すべてがIターンで、英語でのガイドなどインバウンド事業の主体としても活躍しています。

◇NPO 法人隠岐しぜんむら

〒684-0403 鳥根県隠岐郡海士町海士5328-6

電話：08514-2-1313

<http://www.sizenmura.com/about>

### ④「隠岐旅工舎」

近年、着地型観光や体験型の観光推進が唱えられている中、隠岐では着地型、体験型の旅行商品の造成や受け入れ



「隠岐旅工舎」による闘牛の散歩。

◇隠岐旅工舎

(山陰観光開発株式会社)

〒685-0013

鳥根県隠岐郡隠岐の島町

中町目貫の四 54-3

電話：08512-2-7100

<http://www.okitabi.jp/>

態勢の整備はいまだに進んでいません。多様化するニーズや個人型の旅行形態に対応できなければ、観光を機軸とした隠岐の地域振興は望まれません。こうした状況に対して、「隠岐の歴史文化や豊かな自然環境だけではなく隠岐の人々の生活習慣や人との出会いを創出し、訪れる人との交流を主体とした旅行商品の造成販売を目的として二〇〇九年に「隠岐旅工舎」(隠岐の島町)が設立されました。隠岐旅工舎の体験商品には、闘牛用の牛の散歩や岩ガキの収穫体験など、これまで旅行商品としては考えも浮かばなかったユニークな体験メニューがつけられています。

⑤「秀月堂」

旅行事業者だけでなく、島のお菓子屋さん「秀月堂」(隠岐の島町)もジオパーク推進協議会とともに隠岐を元気にする取り組みを行なっています。隠岐ジオパークのロゴマークや見どころをパッケージにデザインした「さざえ最中」や「シマドレーヌ」は、新たな隠岐のお土産として人気商品となっ



「秀月堂」のさざえ最中とシマドレーヌ。

◇秀月堂

〒685-0014  
島根県隠岐郡隠岐の島町西町  
八尾3-65  
電話：08512-2-0433

誇りと愛情を持って隠岐を伝える

隠岐ユネスコ世界ジオパーク推進協議会は「隠岐の人々が誇りと愛情を持って隠岐を語り伝える」ことを理念として活動を行なっています。隠岐には高校までしかなく、高校を卒業した子どもたちの九五パーセント以上が島を離れます。私も島の中学校を卒業後、本土の学校に進学し建設

会社で一一年間勤務しました。その時、出身地の話題になると、離島という劣等感と、隠岐について学んでこなかったため故郷を語る事が出来ず、隠岐の出身ということを感じていました。また、私が生かす頃には「早く大人になって島を出たい。島を出たら帰って来たくない」という考えでしたが、最近では「島を出ても、将来隠岐に帰ってきて隠岐のために働きたい」という子どもたちが増えていきます。

ガイド会社やNPOなどの環境保護団体、旅行会社などと連携し、こうした子どもたちが働ける場を創出することも私たち隠岐ユネスコ世界ジオパーク推進協議会の役割だと考えています。

島を元気にする——。それは私たち自らが誇りと愛情を持って地域を語り伝えることから始まるのではないのでしょうか。



野邊一寛 (のべかずひろ)

隠岐ユネスコ世界ジオパーク推進協議会事務局長。隠岐の島町出身。中学卒業後、本土の学校に進学し大手建設会社に入社。Uターン後役場職員として勤務するかたわら官民協働のまちづくりに関わる。平成23年から同協議会へ派遣され、同26年4月から現職。